

令和2年度第1回・第2回・第3回  
とみやわくわくミーティング実施報告書

テーマ：まちづくりの基本となるルールについて  
～わたしたちの協働の指針をつくろう！～



# 第 1 回

日 時	令和2年8月28日（金）午前9時40分～午前11時30分
場 所	富谷市役所 302～304会議室
座 長	宮城大学 事業構想学群 准教授 佐々木 秀之
参 加 者	一般参加 10名 富谷市協働のまちづくり推進審議会委員 4名 富谷市 6名（市長、総務部長、市民協働課4名） 傍聴者 3名

## 実施状況

時間	内容	状況写真
9:40～ 10:00	村インテーン ①自己紹介	 
10:00～ 11:30	ミーティング ①市長あいさつ ②スライド上映 ③情報提供 ④意見交換 （グループワーク）	     

## 市長あいさつ

皆さんおはようございます。本日は第1回とみやわくわくミーティングということで、本当にお忙しいところ、そしてまた、コロナウイルス感染症で日々緊張する中、猛暑日が続く中、ご参加いただきましたことを心より感謝申し上げます。

このわくわくミーティングは、私が就任してから住民の皆さんの声を直接町政、市政の場にとすることで、まず町の時代はとみやわくわく町民会議、市になってからはとみやわくわく市民会議ということで、毎回それぞれのテーマを設けて開催してまいりました。実は昨年、10代の参加者の方に、若い方々に積極的にまちづくりやこういった機会に参加してもらうにはどうすればいいでしょうねと言ったら、まずはこの会議という堅い名前を変えるところから始めてはどうでしょうというご提案をいただいて、確かにそうだなということで、今年度から会議という名前ではなくて、わくわくミーティングという形で、若干柔らかく名称を変えたところでございます。そういった中で、これまでも富谷は市民協働を活発に、市民の皆さんに積極的に取り組んでいただいております。今日ご出席の皆様も様々な形で活躍していただいている皆さんばかりでございます。また近年では、とみぷらがオープンして、富谷塾の塾生たちも3期生が180名いるのですけれども、部活動を通して様々な取組も行われているということで、富谷においては、市民活動そして市民協働が推進されているわけですが、以前から市民協働のルールがもう少し明確にあったらどうでしょうというご意見をいただいております。そういった中で今年度は、富谷市協働のまちづくり推進指針というものを策定しているところでございます。その関係で今回は審議会の委員の皆様にもご出席をいただいております。改めて感謝申し上げます。今日は皆さんからいただいた声を、市民協働のまちづくりに向けた推進をしていくための指針作りに役立てていきたいと思っておりますので、忌憚のないご意見をいただければと思います。

なお、皆さんのお手元にあります富谷の水、これは奥州街道の宿場町として開宿して400年、そして富谷の水道事業が昭和45年に開始されて今年で50周年という記念に作った富谷の水でございます。おいしい水ですので、どうぞ飲みながら忌憚のないご意見をいただければと思います。

最後になりますが、このミーティングに座長として、また今回の指針作り、これまでのわくわく市民会議でもずっと佐々木先生にはお世話になってきたところでございますが、今回も座長ということでどうぞよろしくお願い申し上げます。改めて心より感謝を申し上げまして、開会にあたってのご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

## スライド上映（座長） ～スライドに基づき説明～

改めまして、宮城大学の佐々木です。宮城大学は車で15分ほどの地元の大学です。4年前に富谷市とは連携協定を結んで、今日もひとり学生がお邪魔させてもらっていますが、様々な場面で連携をさせてもらっています。宮城大学には地域連携センターという所がありまして、今そちらで副センター長という役目をやっています。私自身のメインの研究は、資料の2ページの左側にあるのが代表図書なのですが、地域開発と駅裏ということで、地域の開発の裏側の部分をこれまで長年研究してまい

りました。実際に大学で歴史的資料を調べて、これは河北新報で私の研究を取り上げてもらった時の写真なのですが、座学で東北の歴史を明治から現在まで駅裏という視点で調べてきたのですが、実際にそれを支える機能として、東日本大震災の復興過程、いわゆる組織とか人材、ここでいう非営利組織とか企業の CSR 活動の研究とか、ソーシャルビジネスの研究、それと官公政策とか、特に最近では協働のまちづくりでいろいろな所から呼んでいただいております。協働のまちづくりでいちばん呼ばれているのが、富谷に東北自治研修所という東北や宮城県内の自治体職員が集まって勉強する場所があります。そこに年間7回呼ばれまして、トータルで500人くらいの公務員の方にお話ししているのが、協働というテーマです。そこで話していることを3枚だけスライドで紹介します。

話の肝は、協働という言葉は1970年代にアメリカのインディアナ大学のヴィンセント・オストロムという学者が考え出したコ・プロダクションという言葉が基になっているという話をしております。最近新しく入ってくる職員の皆さんは、協働という言葉は当然のように知っているのですが、どこから出てきた言葉かということが案外わからないこともあります。1977年にこの概念が出てきたということで、50年ほど前にできた概念ということになります。それが1990年代に日本の学者の荒木昭次郎という方が日本に持ってきて、それが協働ということでブームになってきた。要は自治体の行財政の悪化ということも背景にあるわけですね。これまでは依頼があれば自治体で解決できたのですが、それだけでは日本の自治体行政を運営するのが難しくなってきました。みんなで一緒に取り組む必要がある。その時のみんなというのは地域住民と自治体の職員だったわけですね。このふたつの主体でした。実際にやっていくうちにいろいろな問題が出てきました。行政と民間の対等なパートナーシップ関係ってどういうことだろうということで、議論が研究の分野でも実際に出てきました。ただ、問題が出るということは良いことなのです。なぜかという、協働というものが進んでいったので、やっていく中でいろいろな問題が出てきたと。問題が出ないというのは、何もしないと問題が出ないのですが、そうではなく、しっかり日本で協働が取り組んでこられたので、問題が出てきた。そういうところで、6ページが私に関わった、塩竈市の景観をいかに守るかというところの協働の設計図なのですけれども、こういった取り組みが日本各地でかなり積極的に行われてきました。あとは東日本大震災もありました。協働の定義を日本に持ち込んだ荒木昭次郎先生は、この協働の定義を変えました。大きく変わったところは、これまで自治体職員と地域住民とだけ言っていたのですが、異なる複数の主体がということで、多様なセクターが協働する必要があるというようになりました。特に東日本大震災では行政だけではどうにもなりませんでしたし、住民だけでも厳しかった。ということで、時に大学生や若者とか、企業とか、組織とか、そういうものがいかにまとまって、主体となって活動してきたことが重要なのだということをお話されて、今各地で多様な協働が展開されているということになります。

8ページは私に関わった事例の紹介になりますけれども、3年前に仙台市の依頼を受けまして、仙台市の市民活動サポートセンターのリノベーションと、私が監修しまして13年ぶりに改訂したのですが、協働の手引きと事例集を作りました。仙台も協働のまちづくりということで進めてきたのですが、その間の事例というものをもっと大事にしようということで、事例集をセットで取り組んでいます。あとは時には県外から呼ばれることもあるのですが、私も宮城大学ですので、



宮城県のことが中心になるのですが、9ページはお隣の利府町で、協働のまちづくりをこういう風に進めようということで考えたモデルということになります。そんなことを取りまとめた本にもしているのですが、最後に、協働というものも先ほどお話ししましたとおり、1970年代に言葉ができて、1990年代に進んでいきました。これもかなり進化をしてきていまして、当初はこの言葉をいかに浸透させるかとか、行政とのパートナーシップをどう築くかということだったので、最近では活動がどのように展開されているかということが重要視されています。そういう意味では富谷は今活動が展開されてきて、ルールを作るという段階に入ってきておりますので、実際これまでいろいろな地域で条例なんかも作ってきましたけれども、今最先端のところでは、自分たちの活動を見直して、そしてやはり活動は地域によってまったく違うのですよね。なので、自分たちの地域に合った活動が促進されていくようなルールを作っていきたいという風にここにいる皆さんも考えていると思いますので、今日はこれからその時間に充てたいと思います。



#### 情報提供 ～別紙「富谷市協働のまちづくり推進指針(案)」に基づき説明～

富谷市では、総合計画において、協働のまちづくりの推進を位置づけ、計画に基づいた取組をこれまで着実に進めてきました。市制移行を機に、同じ目的のために役割を分担し、市と市民、または市民同士などが協力して活動する「協働」の手法を再認識して、市民の思いや活動を活かしながら、よりよいまちづくりを進めていこうという機運や取組がこれまでも増して高まってきています。

このような中で、まちづくりに関わる市民や団体、企業、市などが、共に力を合わせ、まちづくりに取り組むための考え方や方向性を具体的に示すものが必要となってきたことから、みんなで共有することを目的とした、わかりやすい指針をつくることにしました。

本日、資料としてお渡ししております「富谷市協働のまちづくり推進指針(案)」につきましては、昨年度に開催した富谷市協働のまちづくり推進懇話会においてご意見をいただきながら策定した「まちづくりの基本となるルールの素案」を基に作成したもので、これまでのとみやわくわく市民会議や市民協働セミナーにおいて、市民の皆さんからいただいた意見の中で特に多かったものなどを盛り込

んで、富谷市協働のまちづくり推進審議会において審議いただくためのたたき台としてとりまとめたものです。指針をつくるにあたっての基本的な考え方については、本日配布いたしました追加資料をご覧ください。

まず、一つ目は、義務や権利の明確化を目的とするものではなく、まちづくりに関わる様々な主体がお互いを尊重しつながら、より住みやすいまちにしたいという思いを共有し、協働を促進できるゆるやかな枠組みとすること。

二つ目は、市民の思いや活動を理解し、まちづくりに関わる様々な主体の気づきと実践につながる実効性のある指針とし、本市の地域性と時代に合った富谷らしい指針とすること。

三つ目は、若い世代をはじめ、あらゆる世代の人が読みやすく、多世代が共有できるわかりやすい指針とすることとしています。

現在、指針案については審議会でご審議いただいているところですが、赤下線部分は7月3日に開催された審議会の意見を踏まえ、今後変更を予定している部分となります。

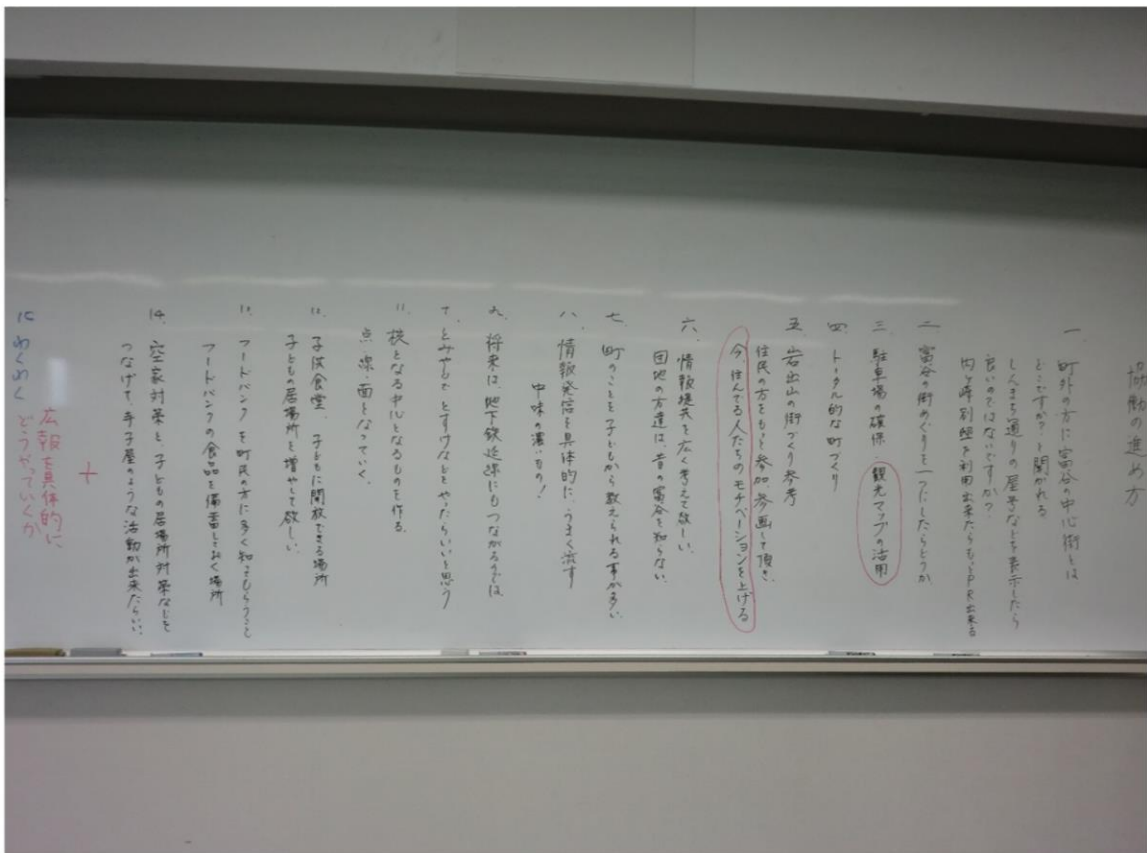
次に本日のわくわくミーティングにおいて、皆さんに話し合っていたきたい部分を説明します。資料の指針案をご覧ください。まず、表紙に記載しております指針の名称は仮の名称となりますが、これだけですと堅いイメージになってしまいますので、サブタイトルについて、皆さんからアイデアをいただき、親しみがあるキャッチフレーズをつけたいと考えています。

次に5ページの下部分になりますが、協働をわかりやすく示すために、皆さんが知っている身近な協働の取組事例を挙げていただき、写真で紹介したいと考えて、あえて空欄としています。

次に10ページの協働の進め方についてですが、こちらも吹き出しが空欄となっておりますが、こちらは協働の実践につながる部分ですので、実際活動されている皆さんのご意見をいただいて、各段階でポイントとなる点を入れていければと考えています。

今後、わくわくミーティングやパブリックコメントなどで皆さんのご意見をいただきながら、年度内に指針を策定する予定です。本日のわくわくミーティングでいただいたご意見につきましても、ぜひ指針づくりに活かしてまいりたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

# Aチーム



**①協働の進め方**  
 ・しんまち地区を中心とした取り組み

**②協働の事例**  
 ・フードバンク  
 ・子ども食堂

**③サブタイトル**  
 ・「わくわく」というワードを入れる



## ＊ ＊ A チームの発表 ＊ ＊

このチームはいっぱい意見が出まして、活動されている部分と今までの思いがこのように書かれたところでございます。①の協働の進め方については、しんまち通りが情報の発信源となって、富谷の中心となっていったらどうだろうというところございました。しんまち通りを情報発信するためにどのように取り組んでいったらいいかというのがいっぱい出された中で、しんまち通りを核として、その他のところでそれぞれの点、例えばお茶作りとかはちみつ作りとか、点を線で結んで、ひとつの面となっていくと、富谷が住みたくなるまち東北ーから日本ーという風になっていくんじゃないかというようなお話をさせていただきました。

②の協働の事例についてはフードバンクと子ども食堂も活動されているということで、先ほどあったはちみつ作りやお茶作りもありますけれども、その他にフードバンクと子ども食堂についても活動していますので、そこで写真を載せることによってさらなる広がりが出てくるといいなという風に思います。

③のサブタイトルについては、そこまでの時間がなくて、「わくわく」という言葉が最後に出て終了とさせていただきました。





# Bチーム

**お互いを知る**

ボランティア募集(広報)

SNS

◎ 目にお機会を増やす

**一緒にやってみる**

スケジュールニングで  
この足を踏む。

↓  
休むことは問題なし  
(気軽に参加してほしい)

サンプル登録

**振り返る**

市役所  
→ 町内会・社協

SNS (Facebook)

広報の方法

(例)

赤十字ボランティアについて  
おやりの会 (ありがとう)

**共感する・目的を共有する**

- ◎ 誰かの為にやりたいと思ってる人
- ◎ 就労支援
- ◎ 安全確認
- ◎ 利用の声

お弁当配達

産後の支援 (社協)

ファミリーサポート (" )

地域コミュニティ (座談会)

子ども食堂

e-2P (富谷塾)

◎ 町内会  
◎ 婦人会  
◎ 子ども会

感謝の事例

支援  
受けらる。

タイトル

**[ゆるく]** 书かりやすく

- ◎ 気軽に参加
- ◎ 市を受取る
- ◎ 中野地区
- ◎ 町なかで" (ホールと町中)

### ①協働の進め方

- ・目にする機会を増やす
- ・利用者や主催者側の声を載せる
- ・サークル登録
- ・気軽に参加できるようなアピールを行う

### ②協働の事例

- ・お弁当配達
- ・産後の支援（社会福祉協議会）
- ・ファミリーサポート（社会福祉協議会）
- ・地域コミュニティ（座談会）
- ・こども食堂

### ③サブタイトル

- ・ゆるく  
→だらけるようなイメージがある
- ・市を愛する
- ・ゆるやか
- ・みんなで



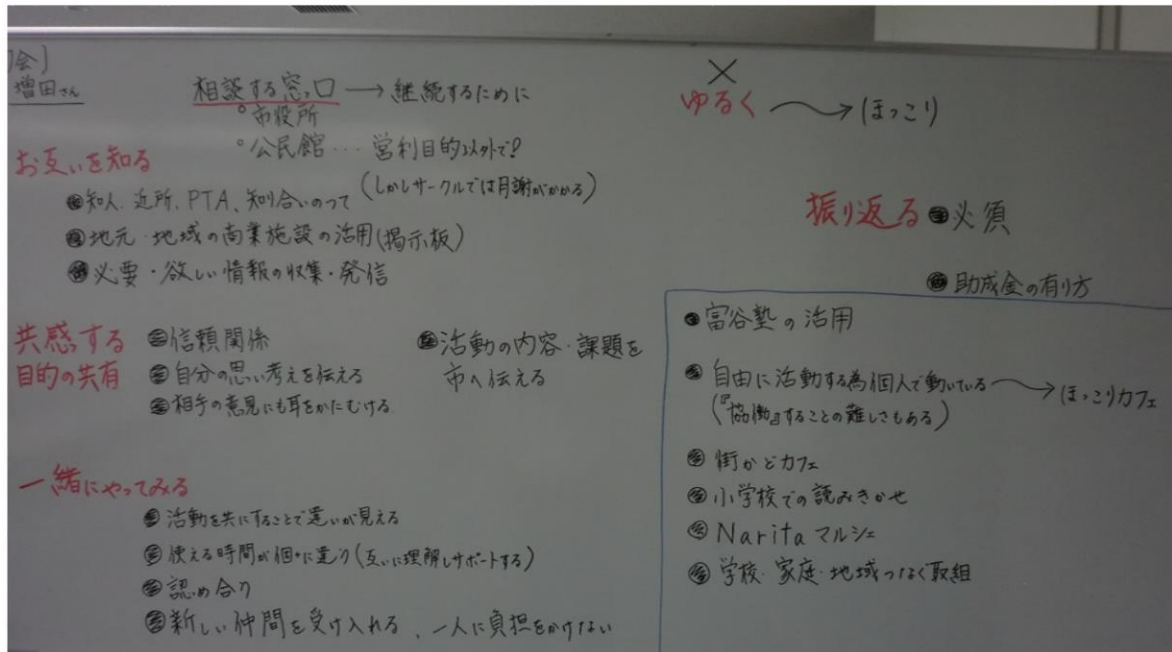
## ＊ ＊ B チームの発表 ＊ ＊

10ページの協働の進め方のところをお話して、お互いを知るといふ部分で、目にする機会を増やすといふまとめになりました。あとは「共感する」といふところで、イメージとか利用者の声とか実際に主催している側の声を載せることで、共感を得やすくなるのではないかといふところでまとめました。「一緒にやってみる」といふところでは、スケジュールがなかなか合わなくて、そういったところが課題なのではないかといふお話があったので、サークルとかの小さいまとめごとに登録したりとか、気軽に参加できるというようなアピールをすることが大事なのではないかとなりました。「振り返る」のところは時間がなかったのでお話ができませんでした。

協働の事例とサブタイトルのところについては、協働の事例は特に取り上げるとすると地域コミュニティのところは行政と直接というわけではないのですが、行政が行き届かないようなサポートを地域コミュニティの個人個人でやることによって、さらにより良いまちになるのではないかといふことで、地域コミュニティといふところが大きいなと思いました。

サブタイトルのところについて、「ゆるくたのしくつながるとみや」といふところのいちばん最初のゆるくといふ部分がちょっと引っかかるなといふお話があって、市の方に聞いたら気軽に参加できるという意味で「ゆるく」を使ったといふお話があったのですが、我々のイメージだとちょっとだらけるようなイメージがあったので、そこを何か良いワードがないかなとお話していて、「市を愛している」とか、「ゆるやか」とか、「みんなで」とか、オールとみやと市長が言っていることもあったので、この3つが出たのですが、あとは時間がなくなってしまったので、こんな感じでお話をしました。

# Cチーム



## ①協働の進め方

- ・相談窓口をつくる
- ・知り合った人に思いを伝える
- ・共感した人としっかり時間をかけて話し合う
- ・お互いを認め合って、お互いができる範囲 (=無理をしない) で受け入れる
- ・自分たちの活動を市に伝える  
→市がそれぞれどんな活動をしているのか把握でき、情報を発信できる

## ②協働の事例

- ・富谷塾
- ・街かどカフェ
- ・小学校での読み聞かせ
- ・Narita マルシェ
- ・地域・学校・家庭をつなぐ取組

## ③サブタイトル

- ・「ほっこり」というワードをいれる

## ＊ ＊ Cチームの発表 ＊ ＊

リアルタイムで活動を始めた人がいらっしまったので、その人がどうのご苦労があってどういう状況を照らし合わせながら話し合いを進めました。まず、思いが高まった時にどこに相談したらいいか、どこで始めたらいいかわからなくて困ったということで、例えば公民館だと既に登録している人が優先だったり、そういうこともわからないということもあるので、公民館の利用はこうなっておりますとか、町内会館を利用したいならこういう手続きになっていますとか、そのようなことがわかる窓口というのがあるといいのではないかとということです。それからお互いを知る、共感する・目的の共有。このふたつがしっかりできていないとその先が続かないよねという話で、まずは友達とか PTA 関係とかサークルとかで知り合った人に思いを伝える、その後共感した人と一緒に話し合いを進める、そこに時間をしっかりかける。その土台をしっかりとしてから物事を始める。このふたつの土台が大事だということ。じゃあ実際にやってみるといふ時に、モチベーションもかけられる時間も違うということで、お互いを認め合っ、お互いのできる範囲で無理をしないで受け入れる、認め合う、という気持ちがないとギクシャクしてしまうよねという話になりました。ギクシャクしたりしてもその都度振り返りをして、あそこはこうしたほうが良いと思ったよというような話をする中で、いい形で活動が続いていくなという話になりました。このすべてに市が関わってくれというのではなくて、市にはそれぞれにどう活動をしている人たちがいるのかというのを把握してもらおうとすごくいいのではないかとということで、例えば一年間の活動報告でも、その都度ではなくてもいいから、私たちは今年こういう活動をここでしましたというような報告書をあげて、市が富谷のこういう所でこういう人たちがこういう活動をしていると把握してくれると、例えば相談に来た時に、あなたの地区ならこういう活動をしている所がありますよと伝えることもできるので、自分たちがやった活動を市に伝えることが大事じゃないかなという話になりました。あとは富谷塾でいろいろ助けてもらって、いろいろな情報ももらったということがあったので、二つ目の話し合いでは富谷塾の話も出ました。

最後のサブタイトルなんですけれども、やはり前のチームと同じで、「ゆるく」という所に引っかかるみんな言っていて、そこは例えば温かいという気持ちを入れたくて「ほっこり」はどうだろうかという話が出て終わりました。





## 第2回

日 時	令和2年8月28日（金）午後1時30分～午後3時20分	
場 所	富谷市役所 302～304会議室	
座 長	宮城大学 事業構想学群 准教授 佐々木 秀之	
参 加 者	一般参加	9名
	富谷市協働のまちづくり推進審議会委員	4名
	富谷市	6名（市長、総務部長、市民協働課4名）
	傍聴者	2名

### 実施状況

時間	内容	状況写真
13:30～ 13:50	初インテ-ション ①自己紹介	 
13:50～ 15:20	ミーティング ①市長あいさつ ②スライド上映 ③情報提供 ④意見交換 (グループワーク)	     



## 市長あいさつ

皆さんこんにちは。本日は大変お忙しいところ、また猛暑の中、このわくわくミーティングにご参加いただきましたこと、心より感謝を申し上げます。このわくわくミーティングにつきましては、私が就任以来、当時まだ町でしたので町民の声を直接町政の場に届けていただけるような機会をとということで、わくわく町民会議ということでスタートいたしました。毎回テーマを設定して、年に何回かずつ開催してまいりました。市になってからはわくわく市民会議ということで開催してきたところですが、実は昨年開催した時に10代の若い方に、こういう機会にもっと若い方に参加していただくにはどうすればいいだろうという話をしたら、まずはわくわく市民会議の「会議」という名称を変えるところから始めてはどうでしょうかというご意見をいただきまして、たしかに我々も気づかなかったなと思っておりました。改めて今年はもっと気楽に参加できるような名称にということで、とみやわくわくミーティングという形で開催させていただいているところがございます。これまでも富谷において市民協働のまちづくりをもっと推進していこうということで、そのルール作りが必要ではないかというご意見をいただいております、市としてもずっと必要だなと思っておりました。いろいろ他自治体の取り組みなども参考にさせていただきながら準備を進めてきたところでございます。そういう意味では、今日はもう既にそれぞれのお立場で市民活動、市民協働に参加されている皆さん方にご参加いただいております。この市民協働の在り方について、今年には市民協働のまちづくり推進指針の策定に向けて進めているところでございまして、その関係で今日は協働のまちづくり推進審議会の委員の皆さんにもご同席いただいております。改めて心より感謝申し上げます。

座長の佐々木先生はこれまでわくわく市民会議から引き続き、いろいろな形でアドバイザーや協働のまちづくり推進審議会の会長をお務めいただいたりと大変お世話になっている先生でございます。このわくわくミーティングも佐々木先生に座長として取りまとめをしていただきながら、皆様方には富谷市の在るべき協働のまちづくりの指針作りに向けて、忌憚のないご意見をいただければと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

後ほど紹介があるかと思いますが、皆さんのお手元にある富谷の水でございますが、今年には奥州街道の宿場町として開宿してから400年という節目の年を迎えております。1620年の9月13日付けで伊達政宗公の書状をもって富谷が宿場町として誕生してから400年という時を経て今があるわけでございます。まさに先人の皆さんのたゆまぬ努力のおかげで今の富谷があるわけでございますが、その開宿400年の記念と、昭和45年に富谷の公営水道事業がスタートして今年がちょうど50周年ということで、この二つの節目を記念しておいしい富谷の水を作りましたので、ぜひ富谷の水を飲んで喉を潤していただきながら、忌憚のないご意見をいただければと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

## スライド上映（座長） ～スライドに基づき説明～

皆さん改めましてどうぞよろしくお願いいたします。今日は短い時間でございますが、有意義な時間にしていきたいと思っております。少しだけスライドを用意してきましたのでご紹介したいと思います。最初のイントロダクションぐらいに聞いてもらえればと思います。富谷と宮城大学は4年前に連携協定を結びまして、最近では学生も富谷のいろいろなプロジェクト、今日も菅野さんが審議会委員としてお邪魔させていただいたり、いろいろな形で学生がお世話になっています。宮城大学の中に地域連携センターというセクターがありまして、そこで副センター長という役を仰せつかっておりまして、自治体との連携を進めております。私のメインの研究は、経済史の立場から地域開発に関する研究を行ってきました。宮城大学に来てからはあまり行ってはいないのですが、ここ20年駅裏という視点から地域開発の研究をしてみまして、資料の2ページの左側に映っているのが私の主著であります「地域開発と駅裏」という本と河北新報で取り上げていただいた私の研究紹介のページになります。研究としては歴史的アプローチから駅裏の研究をしているのですけれども、それに付随して実践研究をしています。2ページの右側に本が3つ映っているのですが、地域づくりの人材と組織の研究、地域の経営の研究、主にソーシャルビジネスということでやっています。そして自治体の地域政策の研究ということで、観光とここで取り上げる協働のまちづくりということの研究を進めておりまして、今日は地域政策と協働のまちづくりの部分を応用して皆さんとお話していければと思っております。特にこの協働のまちづくりに関しては、大学での授業というより自治体の皆さんにお話する機会がありまして、富谷に東北自治研修所という施設があるのをご存じでしょうか。東北の自治体の職員の方が学びに来る場所がありまして、私もそこで年7回講師をしております。1回あたり70人ほど来ますので、県内の自治体職員500人ぐらいの皆さんにお話をしているのですけれども、そこで学生というよりは、自治体の皆さんに協働のまちづくりについてお話をしているということになります。

そこでエッセンスとして協働という言葉がどこから出てきたのか、それがどのように日本に入ってきたのかということをお話していますので、そのお話をしてワークショップに移っていきたく思います。今協働というと、当たり前のように言葉を知っているという状況です。その中で自治体の皆さんに元々この言葉はどこから出てきたのかは非常に重要ですとお話をしています。これは1977年にアメリカのインディアナ大学のヴィンセント・オストロムという学者がコ・プロダクション (co-production) という概念を提示しました。約50年前の概念ということになります。最近、この概念が重要ではないかということで再認識されています。「コ (co)」というのは協力してという意味なのですけれども、共に生産をしていこうということで、生産という概念が改めて重要視されています。この50年ほど前の概念が1990年代に荒木昭次郎という日本の学者が導入してきたといわれているわけです。3ページに定義が書かれていますけれども、荒木さんは当初、協働といっても誰がやるのかということで、地域の住民と自治体の職員という2つのセクターが協働を進めると定義しました。そこで実際にやってみるといろいろな問題が出てくるわけです。問題が出るのは悪いことではなくて、進めるからエラーも出てくるわけですけれども、やってみると地域住民と行政の関係性で、対等とか、パートナーシップとか、難しいのですね。どちらが上か下かという話にもなるわけです。それがいろいろ議論されていって、6ページが私が塩竈市で作った、行政と市民組織と事業者の関係性

を示した図なのですが、このようなことが全国で取り組まれてきました。実際に言葉では提示されたのですが、進めていくにはどうすればいいかということで様々な苦労がされて、日本の協働というものが進んでいきました。特に私も東日本大震災で協働というものが改めて重要だと思いました。やはり振り返ってみると行政だけでは何もできなかった、地域住民だけでも何もできなかったということでいろいろな人達が力を合わせたのですが、それに併せて荒木さんも2012年に協働の定義をもう一度再定義しました。これまで地域住民と行政の協働だとされていたのですけれども、震災を経て異なる複数の主体が互いに共有可能な目標で、その目標を達成していくために、異なる複数の主体が力を合わせる必要があるのだと再定義をしたということになっているわけです。ということで、今日この協働ということについて考えていくわけですが、今重要なのは地域によって協働のスタイルも彩りがあってよいのではないかということです。

私がやっている事例をいくつか紹介したいのですが、お隣の仙台市で4年前に行った取り組みで、仙台市も市民協働を頑張って進めてきました。最近では市民協働という言葉が仙台市も使っていないのですけれども、協働のまちづくりということで改めて進めたいということで13年ぶりに改革をしたいと私に依頼がありまして、フォーラスの向かいにある市民活動サポートセンターのリノベーションのアイデアを私のほうで出しまして、もうひとつ協働を進めるマニュアルがあったのですけれども、これを改訂してほしいという話がありました。とはいえ13年もやっていたので、マニュアルだけではなくて事例集とセットで作らしようということで、協働まちづくりの手引きと事例集を作りました。あとは隣町の利府町では住民と行政のメンバーで、自分達はこういうモデルがあるのではないかとということでモデルを作りました。ここも事例集を作って今年刊行されました。そういったことをまとめて9ページにある本も出して、世の中に広めています。協働というものも進んできて、いろいろな事例が出てきて、振り返ってみると同じ協働でも地域によって色合いが違ってくるのですね。これからルール作りのアイデアを皆さんにいただくわけですが、皆さん本当に富谷をよく知っている皆さんですし、富谷で活動している皆さんですので、自分達のまちに合ったルールを作りたいと思いますし、そうしていくことが持続可能な富谷の活動につながっていくのではないかなと思います。



## 情報提供 ～別紙「富谷市協働のまちづくり推進指針(案)」に基づき説明～

富谷市では、総合計画において、協働のまちづくりの推進を位置づけ、計画に基づいた取組をこれまで着実に進めてきました。市制移行を機に、同じ目的のために役割を分担し、市と市民、または市民同士などが協力して活動する「協働」の手法を再認識して、市民の思いや活動を活かしながら、よりよいまちづくりを進めていこうという機運や取組がこれまでも増して高まってきています。

このような中で、まちづくりに関わる市民や団体、企業、市などが、共に力を合わせ、まちづくりに取り組むための考え方や方向性を具体的に示すものが必要となってきたことから、みんなで共有することを目的とした、わかりやすい指針をつくることにしました。

本日、資料としてお渡ししております「富谷市協働のまちづくり推進指針(案)」につきましては、昨年度に開催した富谷市協働のまちづくり推進懇話会においてご意見をいただきながら策定した「まちづくりの基本となるルールの素案」を基に作成したもので、これまでのとみやわくわく市民会議や市民協働セミナーにおいて、市民の皆さんからいただいた意見の中で特に多かったものなどを盛り込んで、富谷市協働のまちづくり推進審議会において審議いただくためのたたき台としてとりまとめたものです。指針をつくるにあたっての基本的な考え方については、本日配布いたしました追加資料をご覧ください。

まず、一つ目は、義務や権利の明確化を目的とするものではなく、まちづくりに関わる様々な主体がお互いを尊重しつつながりながら、より住みやすいまちにしたいという思いを共有し、協働を促進できるゆるやかな枠組みとすること。

二つ目は、市民の思いや活動を理解し、まちづくりに関わる様々な主体の気づきと実践につながる実効性のある指針とし、本市の地域性と時代に合った富谷らしい指針とすること。

三つ目は、若い世代をはじめ、あらゆる世代の人が読みやすく、多世代が共有できるわかりやすい指針とすることとしています。

現在、指針案については審議会でご審議いただいているところですが、赤下線部分は7月3日に開催された審議会の意見を踏まえ、今後変更を予定している部分となります。

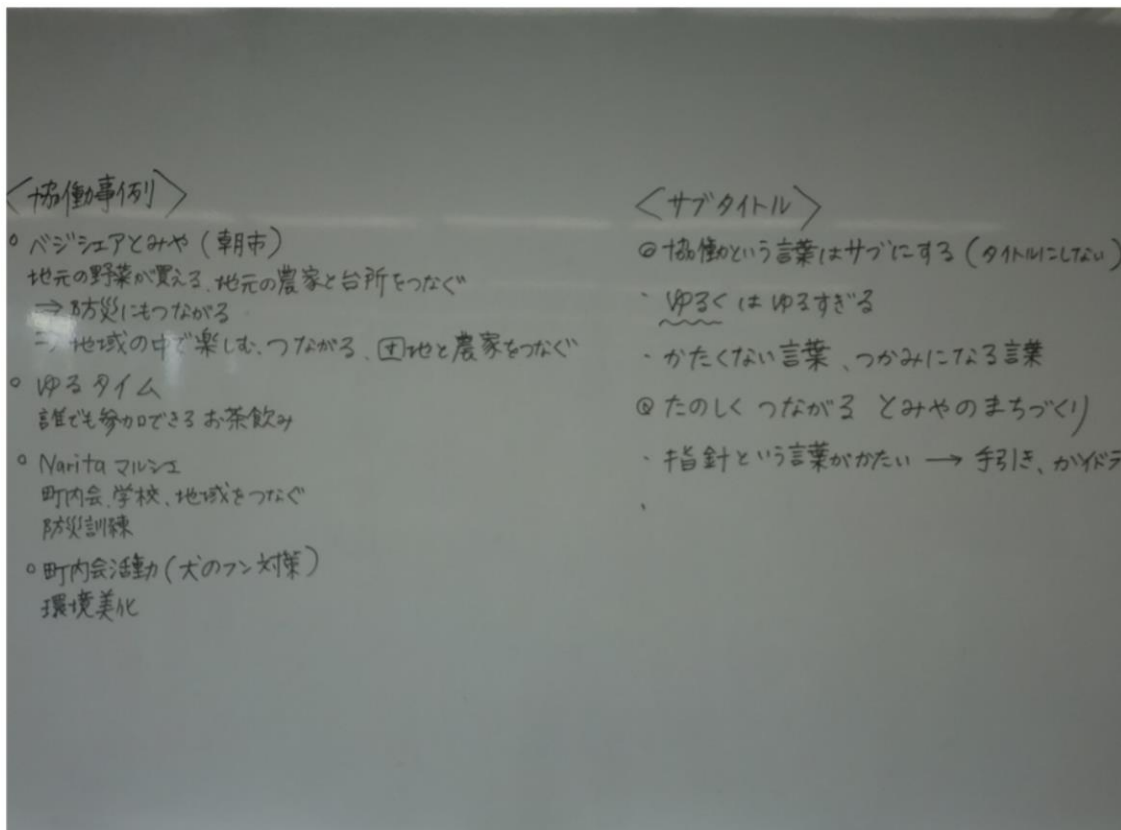
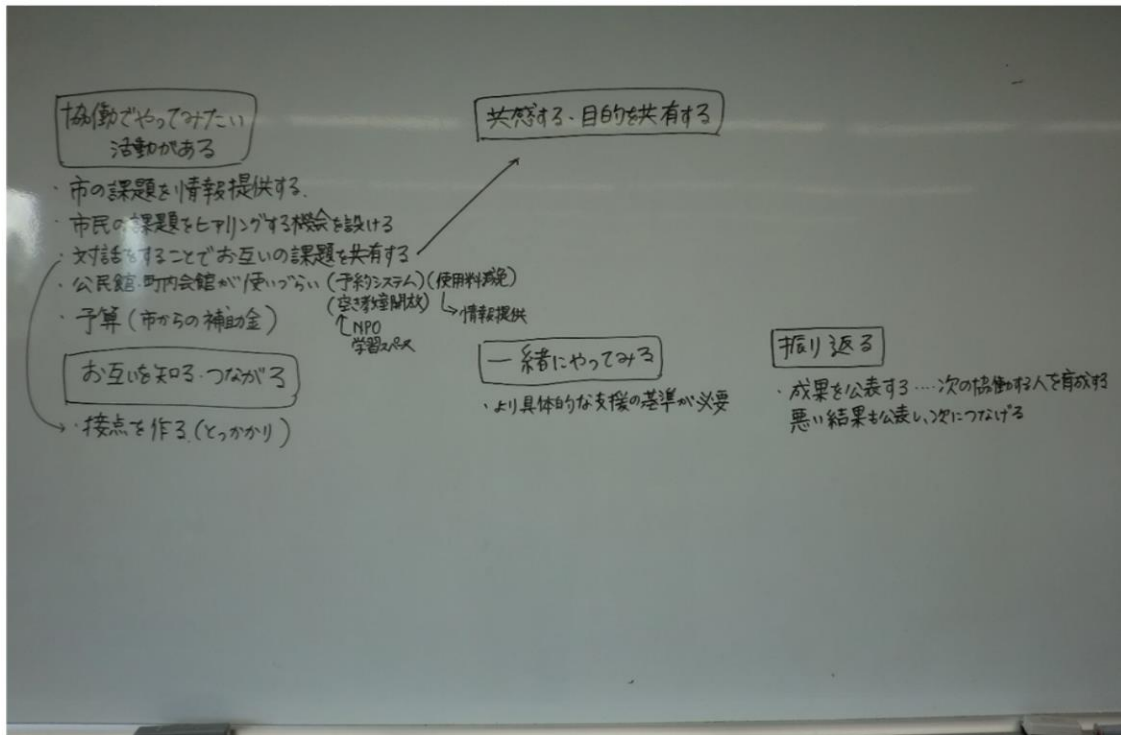
次に本日のわくわくミーティングにおいて、皆さんに話し合っていたきたい部分を説明します。資料の指針案をご覧ください。まず、表紙に記載しております指針の名称は仮の名称となりますが、これだけですと堅いイメージになってしまいますので、サブタイトルについて、皆さんからアイデアをいただき、親しみがあるキャッチフレーズをつけたいと考えています。

次に5ページの下部分になりますが、協働をわかりやすく示すために、皆さんが知っている身近な協働の取組事例を挙げていただき、写真で紹介したいと考えて、あえて空欄としています。

次に10ページの協働の進め方についてですが、こちらも吹き出しが空欄となっておりますが、こちらは協働の実践につながる部分ですので、実際活動されている皆さんのご意見をいただいて、各段階でポイントとなる点を入れていければと考えています。

今後、わくわくミーティングやパブリックコメントなどで皆さんのご意見をいただきながら、年度内に指針を策定する予定です。本日のわくわくミーティングでいただいたご意見につきましても、ぜひ指針づくりに活かしてまいりたいと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

# Aチーム





### ①協働の進め方

- ・市の課題を情報提供する

### ②協働の事例

- ・ベジシアとみや
- ・ゆるタイム
- ・Narita マルシェ
- ・町内会活動

### ③サブタイトル

- ・メインタイトルとサブタイトルを入れ替える
- ・「ゆるく」はゆるすぎる
- ・「指針」という言葉が堅い  
→「手引き」「ガイドライン」



## ＊ ＊ A チームの発表 ＊ ＊

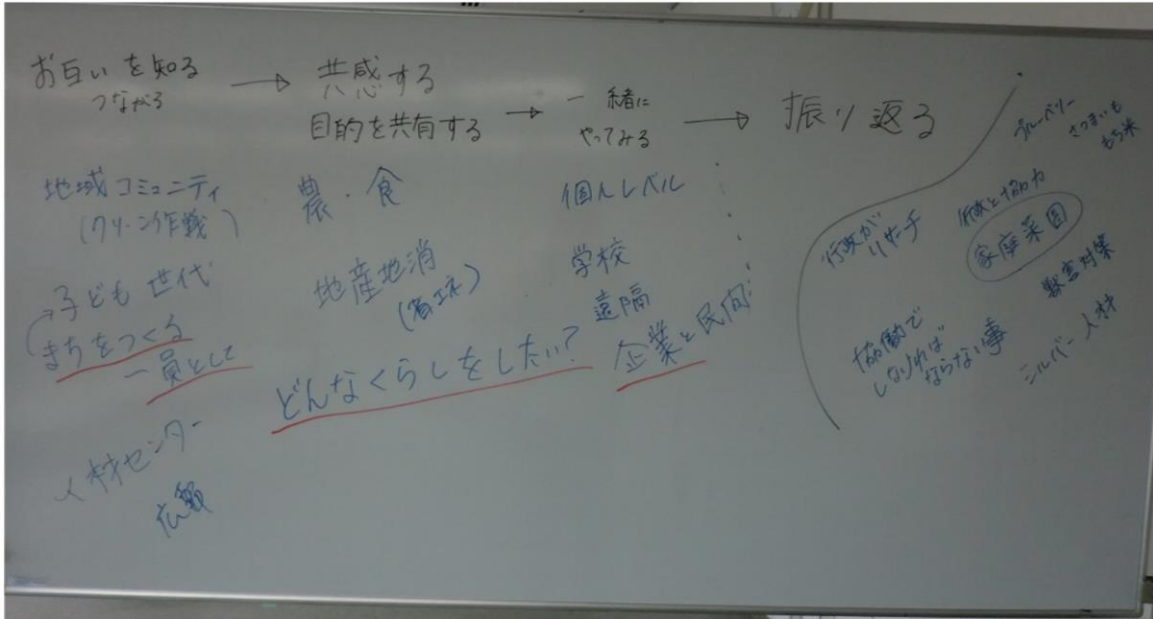
まず、協働の進め方についてということで、10ページに沿ってお話をしたのですが、協働とはなんなのかをそこから入らなきゃいけないのではないかとこのところから意見をいただきまして、そこから少しハードルを下げながら市民の方にわかるような形でというところで話を進めていきました。まず、協働にいちばん必要なのは、対話と情報の共有であるという意見が出まして、皆さんもまずそれだよということ、情報がなければ何も協働のスタートが切れないというお話がありました。あとは、つながる意味でも、何かきっかけがあるといいのではないかとこのお話になりました、そのきっかけをどうやって作っていくかというのいろいろ話し合われました。①は、対話と情報を共有しあって、そこから協働がスタートするというお話になりました。

②の身近な協働事例については、実際同じグループにいた方が、ベジシアとみやという朝市を通して市民の交流を図ったりとか、あとはゆるタイム、これは世代関係なくお茶っこを飲んだりとか、そういう居場所を作っていこうという活動を今考えているところだという意見が出ましたので、そういうのも取り入れられたらいいですねというお話、あとは皆さんもご存じかもしれないですけども、成田地区でやっている Narita マルシェの事例なんか、ぜひ載せたらいいのではないかとこのお話になりました。

③の指針のサブタイトルについてなんですが、これは皆さん目から鱗というところがあって、まずこの富谷市協働のまちづくり推進指針というのが堅すぎるんじゃないかというところで、実際に今サブタイトルになっているところをメインのタイトルにして、ちょっと堅いタイトルをサブタイトルにすると市民の方も受け入れやすいんじゃないかというお話が出て、わあっとみんなで盛り上がりました。

以上3件ワークでお話しましたが、本当に貴重なご意見を皆さんからいただいて私自身も勉強させていただきました。ありがとうございました。

# Bチーム



P5

◎ 身近な協働の事例

- フリーゾーン (子どもいる) 東向中
- お祭り
- 富谷茶 農家の
- バジミョア 富谷塾
- はちみつ

表紙

◎ サブタイトル

ゆるく たのしく つながるとみやの協働

一員としての自覚

内容・目的・中身 方向性

誰でしるか

一緒にやる

協

### ①協働の進め方

- ・協働の在り方について確認する

### ②協働の事例

- ・クリーン作戦
- ・ベジシェアとみや
- ・富谷塾
- ・はちみつプロジェクト
- ・富谷茶復活プロジェクト

### ③サブタイトル

- ・まちづくりの一員であるという自覚を持てるような言葉を入れる
- ・具体的な内容を盛り込む

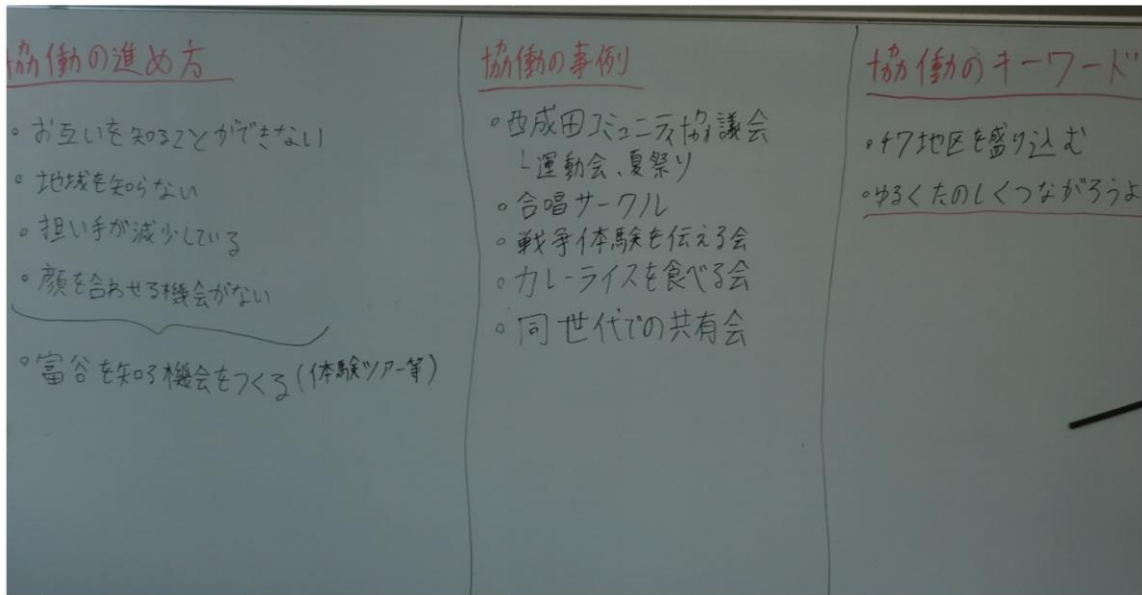


## ＊ ＊ Bチームの発表 ＊ ＊

この班では農業に携わっている方が多かったので、農業目線での意見が多く出ました。あとは市との協働の在り方について再確認する必要があるという話もありました。協働事例のところについては、富谷塾で、さっきAチームからもお話があったんですけども、ベジシェアの話もありました。あとは行政と市民ではなくて市民同士のつながりという意味で地域のお祭りとか、子どもたちがやっているクリーン作戦も協働の一部なのではないかという話もありました。

サブタイトルについては、もうちょっと内容とか具体的なものを入れたらいいのではないかという意見と、我々市民が協働のまちづくりをする一員なんだよというのがわかるような言葉を入れたいという話が出ました。

## Cチーム



### ①協働の進め方

- ・体験ツアーなどの富谷を知る機会を作る

### ②協働の事例

- ・西成田コミュニティ協議会の運動会や夏祭り
- ・合唱サークル
- ・戦争体験を伝える会
- ・カレーライスを食べる会
- ・同世代での共有会

### ③サブタイトル

- ・「ゆるくたのしくつながろうよ」
- ・47地区を盛り込む



## \*\* Cチームの発表 \*\*

こちらの班ではいろいろな事例を出していただいて、その中でなかなか集まらないのをどうしようか、あとは高齢化で集まってくれないというのもあり、地域によって集まらない部分もあるので今後どうやっていったらいいかをいろいろ話し合いをさせていただきました。あとはサブタイトルの部分なんですけれども、富谷市協働のまちづくり推進指針という部分があるので、サブタイトルにまでとみやの協働とつける必要はないのではないかということで、「ゆるくたのしくつながろうよ」でどうだろうかというお話が出ました。



## 第3回

日 時	令和2年8月29日（土）午前9時40分～午前11時30分
場 所	富谷市役所 302～304会議室
座 長	宮城大学 事業構想学群 准教授 佐々木 秀之
参 加 者	一般参加 8名 富谷市協働のまちづくり推進審議会委員 5名 富谷市 6名（市長、総務部長、市民協働課4名） 傍聴者 1名

### 実施状況

時間	内容	状況写真
9:40～ 10:00	初インテ-ション ①自己紹介	 
10:00～ 11:30	ミーティング ①市長あいさつ ②スライド`上映 ③情報提供 ④意見交換 (グループワーク)	     



## 市長あいさつ

皆さんおはようございます。本日は土曜日、それぞれにご用事もある中、また猛暑の中、とみやわくわくミーティングにこのように多くの皆さんにご参加いただきまして、改めて心より感謝を申し上げます。このとみやわくわくミーティングは、私が就任以来、住民の皆さん、当時は町でしたので町民の皆さんの声が届く町政をとということで、直接住民の皆さんのご意見をいただける場として、わくわく町民会議としてスタートいたしました。毎回テーマを持ちながら、テーマごとに開催をしていたところでございます。子育てをテーマにしたり、福祉をテーマにしたり、毎回それぞれテーマを設けながら開催をしまりまして、市制施行後はわくわく市民会議ということで開催をしてきたところでございます。昨年開催する中で、10代の方にご参加いただいた時に、こういう会議にもっと若い人達に参加していただいて声をいただけるといいよねという話をして、どうすれば参加してもらえるか聞いたら、まずはわくわく市民会議という会議が若者にとっては参加しにくい雰囲気を出している、会議という言葉がなくしたらいいのではないのでしょうかということで、たしかにそうだなということで、今年からはとみやわくわくミーティングという形で若干柔らかい名称に切り替えて開催をさせていただいております。昨日から3回連続で開催させていただいております。

富谷は市民協働または市民活動に積極的に活動していただいております。今日ご参加の皆さんももう既に様々な形で市民活動または市民協働にご参加いただいている方ばかりでございますが、さらにこれをいかに推進していけばよいのかということで、今年は市民協働の推進に向けての指針作りを現在進めているところでございます。そういった関係で、今年は協働のまちづくり推進審議会に諮問をさせていただいております。本日は皆さんと合わせて審議会の委員の皆さんにもご同席をいただいております。改めて心より御礼を申し上げます。そういった中で富谷において、市民協働を推進していく、または市民協働をさらに発展させていくためにはどういう形がよいのか、あまりぎちぎちとしたものではなくて、ゆるやかな指針をみんなで作りましょうということで進めているところでございまして、今年のわくわくミーティングは、市民協働推進に向けての指針についてのご意見をいただくということでテーマにさせていただいたところでございます。

市民会議の頃からずっと座長をお務めいただいております。宮城大学の佐々木先生、本当にありがとうございます。プロフィールもお手元にあるかと思いますが、佐々木先生はこれまでも様々な形で富谷町の時代から、市になってからもご指導、ご支援をいただいております。実は個人的には20年以上親しくさせていただいて、私も本当に信頼する、尊敬する先生でございます。改めて今日も座長としてよろしくお願い申し上げます。忌憚のないご意見をいただきまして、富谷における市民協働をさらに推進していきたいと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

今、富谷塾生も3期生が180人いるのですけれども部活動などいろいろな活動をされています。若生さんは塾生の仲間達と、はにかむ富谷ということで、梅林の再生や最近ではお盆に竹あかりのイベントをしんまちで3日間やっていただいたりと、塾生の皆さんが自発的にいろいろな活動を行っていただいているのですけれども、今日も朝9時からとみぷらの前でベジシェアとみやという地元の農家の皆さんが作った野菜を直接販売する場として、今回が1回目なのですが、今日も暑い中開催されていて、私もたくさんおいしい野菜を仕入れてきたところでございます。そういった実践も含めて、

今後の指針に向けてご意見をいただければと思います。

最後に後ほど紹介があるかと思いますが、富谷の水、これは奥州街道の宿場町として伊達政宗公の命を受けて開宿したのが1620年で富谷が宿場町としてスタートして400年ということで、開宿400年の記念、そして、富谷が昭和45年に水道事業をスタートしてちょうど今年が50周年でその記念に富谷の水というおいしい水を作りましたので、ぜひ喉を潤しながらいろいろなご意見をいただければと思いますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。

## スライド上映（座長） ～スライドに基づき説明～

皆さん、改めましておはようございます。少しだけ協働ということについて簡単にお話したいと思っています。これはどちらかというと大学の授業で話しているというよりは、富谷に東北自治研修所という場所があるのをご存じでしょうか。東北のいろいろな自治体の公務員の方が学びに来る研修所があるのですが、私もそこで講師をしております、年間7回呼ばれているので500人ぐらいの公務員の方にお話をしています。その一部のスライドになります。1回の講義は5時間ほどあるので、今日はエッセンスだけということになります。

まずは私の自己紹介ということで、宮城大学は住所は大和町なのですが、大和町役場に行くより富谷市役所に行くほうが近い地元の大学です。実は宮城大学との連携はあまりなかったのですが、4年前に連携協定を結びました。それから私も地域連携センターの副センター長というお役目をいただいているので、学生をいろいろな局面に参加させていただいて、大変お世話になっています。今日もまちづくり審議会の委員になっている菅野さんなど、学生が貴重な場に行かせていただいているということで感謝したいと思います。

私の研究なのですが、資料の2ページ目の左側に記載されているものが私のメインの研究になります。どちらかというと座学なのですが、日本経済史ということで、少し歴史的なアプローチから持続可能な開発というものをこれまで考えてまいりました。駅裏というものの研究者でもございまして、資料に記載の新聞記事は河北新報に私の研究を取り上げてもらった時の記事です。あとは実践研究をしているのが2ページの右側の3つで、まずひとつは地域づくりの組織とか人材の研究ということになります。日本における中間支援の存在を研究しています。あとは地域の経営と自治体の経営ということで地域政策の研究をしまして、ソーシャルビジネスの授業を宮城大学で持っています。あとは観光の研究が多いのですが、協働のまちづくりというものを震災後に研究しております。最近協働のまちづくりでいろいろな所から呼ばれるようになってきて、富谷や他の自治体でも協働のイメージが強くなっているということで、今日もお邪魔させていただいているということになります。いろいろな自治体でお話をするのですが、そもそも協働ってどういうことなのだろうという質問を多く受けます。協働というのは、地域に行っても、自治体に行っても皆さんなんとなく知っているのです。ただ、この言葉は実は新しい言葉で、元のネタはアメリカのインディアナ大学のヴィンセント・オストロムという方が示した概念で、1977年に示されたコ・プロダクション (co-production) という概念が元になっています。コ (co) というのは一緒にとか、力を合わせてという

意味ですが、生産するという概念です。少し情報として教えておきたいと思いますが、3ページにある写真にヴィンセント・オストロムに寄り添っている奥さんがいますが、彼女はエリノア・オストロムといって、コモンズという水関連の研究でノーベル賞を取った学者ですので、知っておいてもいいのかなと思います。ヴィンセント・オストロムが1977年にコ・プロダクションという概念を作り、50年ぐらい前の概念なのですけれども、今、時を経てこの概念が再認識されているということで、今日のベジシアのようないろいろなイベントを共に作っているということになると思います。これが日本に入ってきたのがいつかという、1990年代になります。日本の荒木昭次郎という学者が協働というものを持ってきました。荒木さんは地域住民と自治体職員の2者が協働の主体だと定義して日本に紹介したのですが、これが日本で広がっていきます。最初は住民の方というより、まずは市長や町長の施策の中に協働が盛り込まれていきました。実際に動くのですけれども、行政職員と住民がどのような関係性なのかということで、対等な関係は難しいのです。そういったところを巡って議論が展開されて、懸念も出てきました。ただ、これは悪いことではなくて、物事は進むと何か問題が出てきます。なので改善をしていく。今日は、ルールを作るということもそういうことで、何か規制をしたりということではなくて、何か進んだ時にその活動をさらに促進するとか、皆さんの活動を守っていくという意味でルールを作っていくのだと思います。まさにこの協働という概念もそうでした。

これは余談になりますが、私が塩竈市で取り組んだ、景観をいかに守るかを市民協働でやろうということで、その時に作ったイメージ図が6ページになります。こういう取り組みが県内の各地でも行われてきました。あとは大きいのは東日本大震災です。協働というものがそれほど理解されていたわけではないのですが、震災でうまくいった自治体を見ると、やはり協働ができていたというのが明らかかなのです。浪江町にしろ、東松島市にしろ、震災前は必ずしもうまくいってなかったのです。みんな嫌々ながらもやっていたと。それが震災が訓練となって機能したとも言われていて、そういう様子を見て荒木さんは概念を再定義し、「異なる複数の主体」と変えました。最初は行政と地域住民だけだったので、震災の時に行政だけでは何もできないし、住民だけでも何もできない。そこに外からの支援や学生や若者や企業、そういうものも非常に重要だったということで、異なる複数の主体と荒木さんが定義を再定義したということをご紹介させていただきました。

最後に、初めにお話ししたとおり、最近協働でいろいろな所に呼ばれているのですが、富谷と隣接する自治体で行った取り組みを少しだけ紹介したいと思います。8ページが仙台市の事例なのですが、元々仙台市は市民協働というものを全国的にもトップランナーとして進めてきたのですけれども、13~14年経過して、なかなか協働が浸透していないということで、マニュアルをもう一度作り直したいという話になりました。その時に私が提言をしまして、可視化することが重要ではないかということで、協働の事例集をマニュアルと一緒に私のほうで監修させていただきました。あとはフォーラスの向かいにサポートセンターがあるのですけれども、そこをリノベーションしたり、というようなことを行いました。隣町の利府町でも協働のまちづくりに取り組んでいまして、これはまだ完成ではないのですが、住民と自治体職員の皆さんで集まって作った利府町のモデルを考えようという取り組みをしています。これらの取り組みを本にして発信したりもしているのですけれども、何が言

いたいかという、協働も定義がいろいろ変化してきて実践も出てきたと。事例を見てみると、地域によって違うのですね。これまでは定義に従って全国画一的に広がってきたのですけれども、今のトレンドとしては、地域によって事例が違うということで自分達ならではの協働モデルを作っていこうということになっておりますので、今日の指針案も先の事例にとらわれず、ぜひ皆さんの活動の中から出てきた言葉で紡いでいきたいと思っております。



#### 情報提供 ～別紙「富谷市協働のまちづくり推進指針(案)」に基づき説明～

富谷市では、総合計画において、協働のまちづくりの推進を位置づけ、計画に基づいた取組をこれまで着実に進めてきました。市制移行を機に、同じ目的のために役割を分担し、市と市民、または市民同士などが協力して活動する「協働」の手法を再認識して、市民の思いや活動を活かしながら、よりよいまちづくりを進めていこうという機運や取組がこれまでも増して高まっています。

このような中で、まちづくりに関わる市民や団体、企業、市などが、共に力を合わせ、まちづくりに取り組むための考え方や方向性を具体的に示すものが必要となってきたことから、みんなで共有することを目的とした、わかりやすい指針をつくることにしました。

本日、資料としてお渡ししております「富谷市協働のまちづくり推進指針(案)」につきましては、昨年度に開催した富谷市協働のまちづくり推進懇話会においてご意見をいただきながら策定した「まちづくりの基本となるルールの素案」を基に作成したもので、これまでのとみやわくわく市民会議や市民協働セミナーにおいて、市民の皆さんからいただいた意見の中で特に多かったものなどを盛り込んで、富谷市協働のまちづくり推進審議会において審議いただくためのたたき台としてとりまとめたものです。指針をつくるにあたっての基本的な考え方については、本日配布いたしました追加資料をご覧ください。

まず、一つ目は、義務や権利の明確化を目的とするものではなく、まちづくりに関わる様々な主体がお互いを尊重しつつながら、より住みやすいまちにしたいという思いを共有し、協働を促進できるゆるやかな枠組みとすること。

二つ目は、市民の思いや活動を理解し、まちづくりに関わる様々な主体の気づきと実践につながる実効性のある指針とし、本市の地域性と時代に合った富谷らしい指針とすること。

三つ目は、若い世代をはじめ、あらゆる世代の人が読みやすく、多世代が共有できるわかりやすい指針とすることとしています。

現在、指針案については審議会でご審議いただいているところですが、赤下線部分は7月3日に開催された審議会の意見を踏まえ、今後変更を予定している部分となります。

次に本日のわくわくミーティングにおいて、皆さんに話し合っていたきたい部分を説明します。資料の指針案をご覧ください。まず、表紙に記載しております指針の名称は仮の名称となりますが、これだけですと堅いイメージになってしまいますので、サブタイトルについて、皆さんからアイデアをいただき、親しみがあるキャッチフレーズをつけたいと考えています。

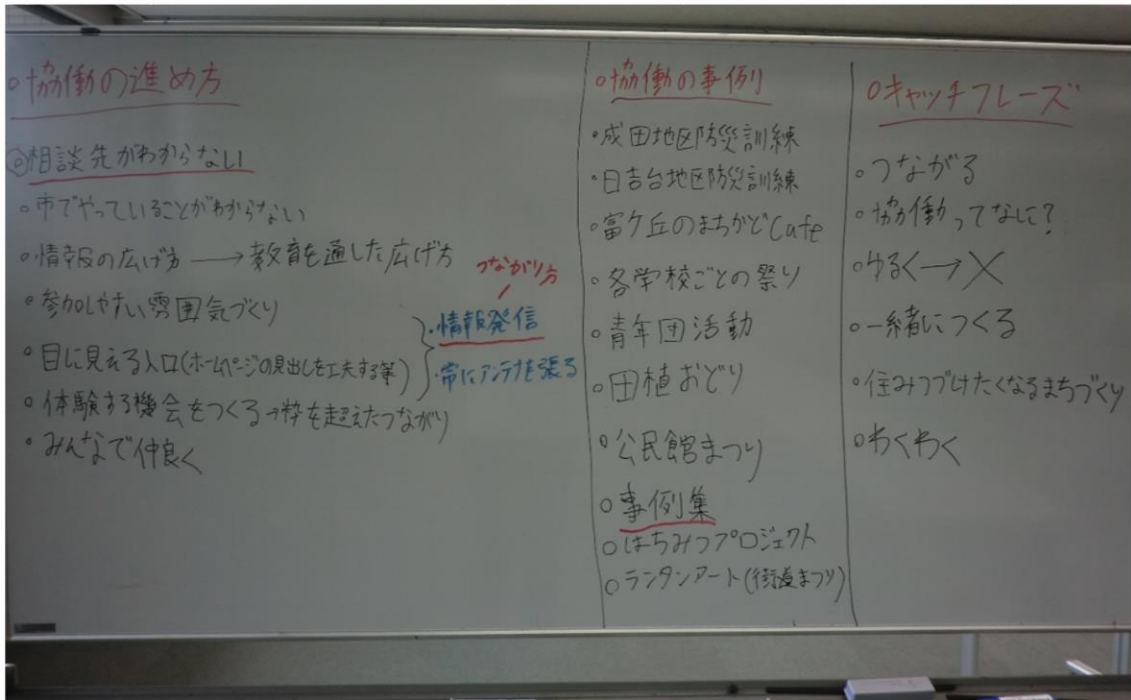
次に5ページの下部分になりますが、協働をわかりやすく示すために、皆さんが知っている身近な協働の取組事例を挙げていただき、写真で紹介したいと考えて、あえて空欄としています。

次に10ページの協働の進め方についてですが、こちらも吹き出しが空欄となっておりますが、こちらは協働の実践につながる部分ですので、実際活動されている皆さんのご意見をいただき、各段階でポイントとなる点を入れていければと考えています。

今後、わくわくミーティングやパブリックコメントなどで皆さんのご意見をいただきながら、年度内に指針を策定する予定です。本日のわくわくミーティングでいただいたご意見につきましても、ぜひ指針づくりに活かしてまいりたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



# Aチーム



## ① 協働の進め方

- ・ 相談窓口の設置
- 窓口があることをホームページにわかりやすく掲載する
- ・ 市民は常にアンテナを張り、情報を得る

## ② 協働の事例

- ・ 事例集を作り、相談先等を掲載する
- ・ 成田地区防災訓練
- ・ 日吉台地区防災訓練
- ・ 街かどカフェ
- ・ 各学校でのお祭り
- ・ 青年団活動
- ・ 田植踊り
- ・ 公民館まつり
- ・ はちみつプロジェクト
- ・ 街道まつりでのランタンアート

## ③ サブタイトル

- ・ つながる
- ・ 協働ってなに？
- ・ 一緒に作る
- ・ 住みつづけたくなるまちづくり
- ・ わくわく

## ＊ ＊ A チームの発表 ＊ ＊

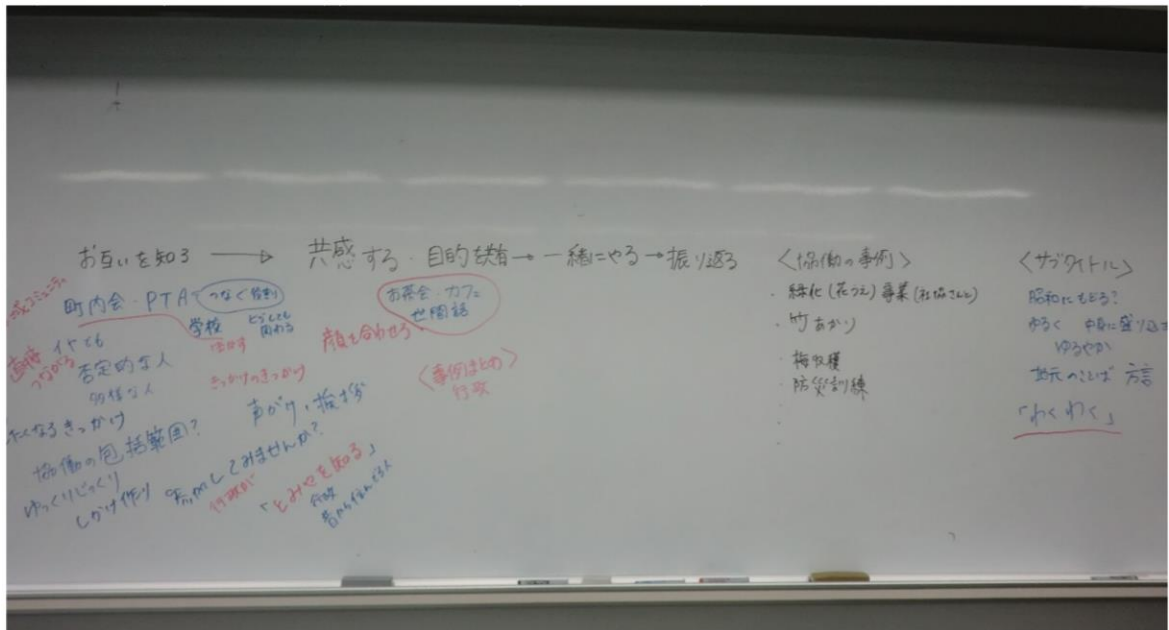
こちらに書いた3つのテーマで話し合いました。協働の進め方に関しては、いろいろなことをやろうとしても相談先がわからないということがありまして、それをわかりやすいホームページなどで載せていただければ、いろいろなことが取り組みやすいのではないかというお話がありました。

協働の事例に関しては、それぞれいろいろなことをやっているのでも、最終的には先生からお話がありましたように、事例集を作ってください、事例集の中で、例えばはちみつプロジェクトに参加したいのだけれどこんなことができないかとか、誰に相談したらいいかとか、そういうことが事例集に入っていると、市民協働課さんのほうで窓口になってもいいのかなと思うのですが、そういったお話がありました。

サブタイトルに関しては、「ゆるく」というのはやっぱり抵抗があるかなということで、いろいろな話が出たものを、そのまま書いております。



# Bチーム



## ①協働の進め方

- ・お茶会などでの世間話から活動を始める
- ・富谷全体を知り、課題や良いところを洗い出す

## ②協働の事例

- ・緑化事業(社協)
- ・竹あかり
- ・梅収穫
- ・防災訓練

## ③サブタイトル

- ・昭和に戻る
- 近所づきあいや近くのコミュニティのつながりを大事にする
- ・地元の言葉や方言を盛り込む
- ・「わくわく」というワードを入れる
- 魅力が「湧く」+わく「わく」する = 「わくわく」

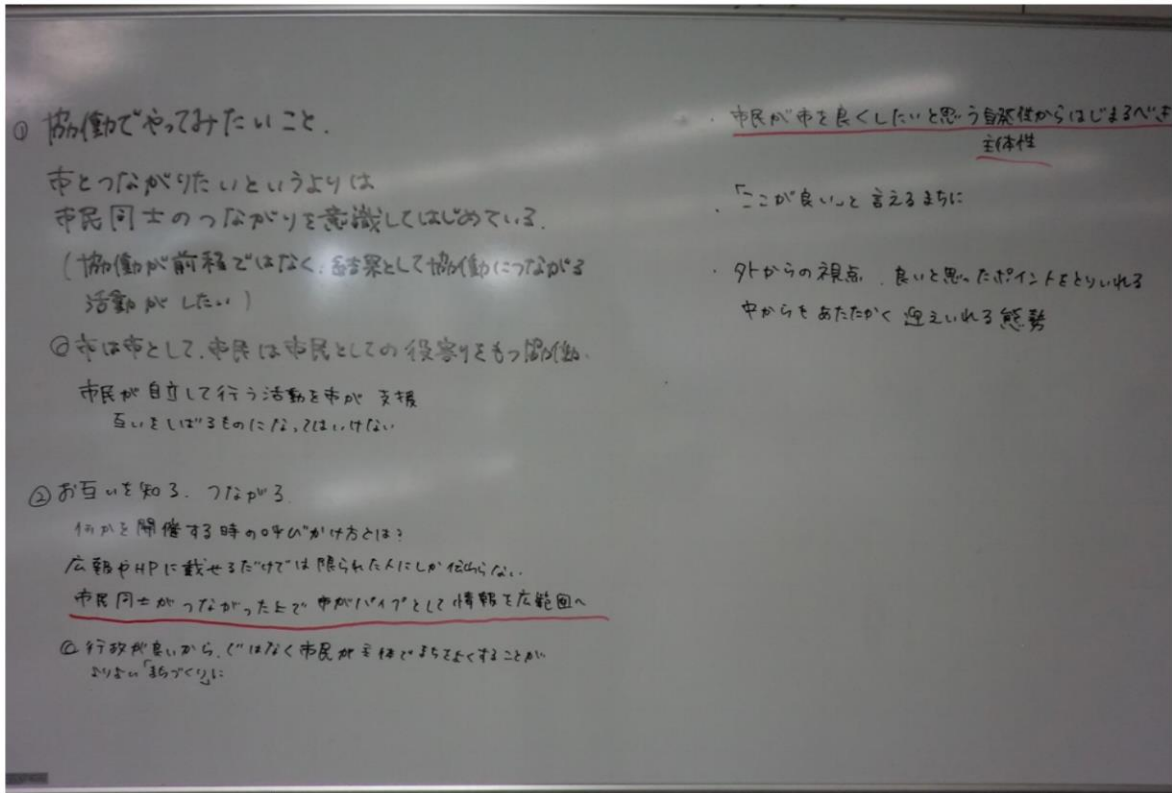


## ＊ ＊ B チームの発表 ＊ ＊

一番最初の10ページのところに関しては、お互いを知ることが一番大事で、知ったことによって、「共感する・目的を共有する」の部分でお茶会だったりカフェとか世間話をしていく中で、こういうことやりたいよねというちょっとしたお話から一緒にやったり、振り返りしたり、改善したりというのが芋づる式についてくるので、まずはお互いを知ることが一番重要なのではないかというお話がありました。その中で町内会とかPTAとか市全体でも細やかなコミュニティの中でつながっていくことが大事で、そういうところで直接つながっていくことが共感する・目的を共有するという部分にもつながっていくのではないかと思います。さらに行政側からアプローチしてもらって、富谷全体を知っていくことも大事で、そこからいろいろな課題や良い点も出てくるのではないかと思います。その中で協働の事例のまとめを作ってくださいということで、自分が何かやりたいと思っている人もホームページが窓口となっていていろいろ活動できるのではないかと思います。その事例のまとめを作るという流れで協働の事例もお話したのですが、この班ではこの4つが出ました。

サブタイトルに関しては、昭和に戻ると書いてあるのですけれども、昔のような近所づきあいというか、近くのコミュニティのつながりも大事にしていくことが協働につながるのではないかということで、昭和に戻るという表現もいいのではないかというお話が出ました。さらに「ゆるく」という部分があるのですけれども、そこを変えるのではなくて、ゆるくというのが伝わるような中身に改善していくということで、ゆるくだといろいろな意味があると思いますが、どういう意味で使われているかということをしっかり中身にイメージすることが大事なのではないかという意見が出ました。あとは地元の方言を1個入れるとか、この会議がわくわくミーティングという名前ですけれども、魅力が湧くという意味の「わく」と、わくわくするという意味のわくわくで入れたらいいのではないかという意見が出ました。

# Cチーム

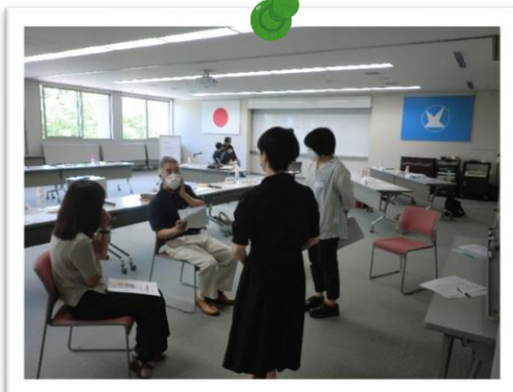


## ①協働の進め方

- ・市は市として、市民は市民としての役割を持つ
- ・市民が自立して行う活動を市が支援する
- ・市民同士がつながったうえで市がパイプとして情報を広範囲へ発信する
- ・市民が市を良くしたいと思う自発性を持つ

## ③サブタイトル

- ・市民が良いまちにしていきたいという思いから成り立っていくということが伝わるタイトル



## ＊ ＊ Cチームの発表 ＊ ＊

まず10ページの「協働でやってみたい活動がある」という始まり、ここがちょっと違うのではないかと  
いうところから話を深めていきました。何かやろうとした時に、じゃあ市も一緒にやりませんかと持っ  
ていくというよりも、大事なのはこのまちが私たちが良いまちにしていくのだという自主的、自発的、主  
体的な動きがあって、それでやっていく中で、ここが市とつながるとより発展するよねというところを市  
とつながっていく、というようなものではないかと思うのですね。ちょうど途中で課長さん達もいらっし  
やった時にお話したのですけれども、10万円の支給も富谷はすごく早かった、あれこそ市がやるべきこ  
とですと課長さんはおっしゃいました。それは私達にはどうしようもなくて、連休も返上して一生懸命や  
ってくれた。市にはそのようなお仕事があります。それと同じように私達住民も、私達住民がやるべきこ  
とがあると思うのです。それをやったうえで協働というものがあるのではないか、そこを履き違えると、  
この協働というものを作ったことですごくどこかに負担がかかってしまう。そういうものになってほし  
くないという話になりました。ちょうど子育て支援課の職員さんがいて、富谷はとても子育てがしやすい  
まちだからと入ってくる方がやはりいるそうです。そういう方達が来てやっぱりその通りだったと思っ  
てもらいたいし、そういう受け入れがあるといいし、そういう方達が外から持ってくる視点、風通しを良  
くしてそういう視点も取り入れながら、より良いものになっていくといいのではないかという話があっ  
て、そういうことも含めてそれは私達住民がやっていかなければならないことだなと思います。

サブタイトルですけれども、「協働」というのは入れなくてもいいのではないかという話になりました。  
協働というとはどうしても市と一緒にやっていきたいと思います。でもそれぞれ役割が違うので、まず私達住  
民、市民が良いまちにしていきたいのだという思いから成り立っていくということが伝わるタイトルに、  
思い切ってしてもいいのではないかという話になりました。